

（飢餓状態） 格子なき牢獄の実態

新潟県 石井 要三郎

私は昭和十五年徴集、現役兵として北滿の国境守備隊で十九年八月に南滿の阜新に編成されました。部隊に転属しました。装備は夏服だけで、南方要員と思っておりました。そのうちに九月に入ると、八八一部隊重松大隊の配属となり、北支討伐に参加して、二十年二月、原隊に戻り、三月になると部隊は赤峰陣地に移動して、私の間もなく幹部教育隊に、旅順に参りました。日ソ開戦となり、学校は八月八日に解散となり原隊にと列車で。ところが、先発した列車は奉天で停車のままでした。動くのは、軍人、軍属または満鉄職員の家族を乗せた列車が朝鮮方面に行くのみで、想像もできないありさまにて、私たち一行もいつ原隊に戻ることができるか、不安の日を過ごしていました。

航空下土候を乗せた列車が錦州方面に出るとの情報

で、それに便乗して八月十三日に阜新に帰りました。当時は在滿召集兵がいっぱいでした。部隊も討伐から翌日が終戦となりました。武装解除のため、召集兵とともに八月十七日に阜新を出発することになりましたが、中国人満鉄勤務者は一人もいないので、召集兵の中から満鉄経験者を探し出して出発でした。

私たちの師団は遼陽に集結して、武装解除を受けました。それから行軍して、八月三十日に海城に収容されました。行軍途中で私の分隊で鞍山昭和製鉄所勤務の召集兵がおりましたので、奥さんのもとに面会してこいといっってやり、そのまま帰ってきました。私は、すでに各分隊から逃亡者が出ているので、そのまま奥さんのもとにと考えていました。その人に理由を聞くと、奥さんは、ソ連最高司令官は旅順において在滿召集者はすぐ召集解除をするということを信用した結果でした。その人は入ソ後、二十一年の暮れに、異国の地で亡くなりました。あのときを今思い出して、残念でなりません。

海城には一か月の生活でしたが、食糧はもみで、白もなく、原始的な生活の始まりでした。鮮人は別棟、大威

張りでした。いよいよ十月五日、海城五大隊として、私たち歩兵と航空隊將校団千五百人は、高橋大尉、新京ハルピンチチハルハル満州里經由で、ソ連の森林地帯で、名称もわからない寒村に十月二十三日に到着、食糧は七十屯貨車で十両連続して、これは日本が食糧難であるから云々、一週間で東京ダモイの夢はどこかに飛んでしまいました。

幕舎生活の始まりで、早速宿舎の建設作業でした。でき上がると、また別の場所でダモイダモイの甘言につられて、第三番につくった所で大豆やグリーンピースのスープと黒パンの生活でした。そのころは高橋大尉はどこか、皆目不明で、朝蔵中尉が指揮をとり、隊付は近藤少尉で、伐採作業でノルマもなく、八時間の労働でした。近藤少尉が入院すると、代わって鈴木少尉となった途端、ソ連のノルマも七立方メートルとなり、また百％以上には食糧の増配云々、公表されても、だれ一人の賛成もなく、病弱者は倒れる馬も同様でした。

空腹なので、馬糧コウリヤンを失敬して食べて生命を保つ方法でありました。作業量の増加は反対であったの

で、ストを決行して徹夜で張った結果は、従来通りでないこととなりました。が、私は反対にプロホラポータとして、病人と一緒に朝蔵隊から追放されました。

有能か無能かの指揮官で左右される現在も同じですが、しかし有能な航空隊の將校もおりました。自動車の積み込み作業でソ連兵の要求をはねつけて、なぐられながら私たちを守ってくれた將校です。その人には感謝しております。地獄から脱出した私たち五十人は、チタの収容所で二十三年春を迎えたのです。仕事も軽作業で食糧事情もよくなったので、体も回復して、民主教育で日本新聞も初めて見ました。四か月ほどでいよいよ待望のダモイと。

列車に乗り、一路ナホトカと信じていましたが、途中イマンで元気の者が降ろされて、病弱者と列車のみがナホトカへ。チタを出発した約千五百人は、主体は盛岡騎兵の人たちでした。要塞地帯のような所で、地名はアントノフカといい、二十二年夏から道路作業でした。そこで驚いたのは羅南師団の人たちで、階級章を付けて点呼をとり「一つ軍人」には二度驚きました。

ほとんど同県人で同級生にも会いました。お互いに頭張ろうと言つて別れました。本当のダモイが昭和二十三年一月十四日にきました。列車を待つこと一週間。それも最後の幕舎生活で、燃料を集める仕事で、水もなし、雪を解かしての生活が続ぎ、一月下旬にナホトカの第一分所に収容されて、チタと同じく民主教育が主で、使役が若干ありました。分所には第五国守時代の初年兵の藤田君と会つたので、当時の勝武屯陣地の模様を聞き、残つた人たちの消息もわかりました。

あまりにも病弱者が多いので、指導部に交渉して、練成隊をつくり、満州で女学校の校長、木村さんを委員長にして、委員会の運営で、帰国を待つて、五月五日の第一船で明優丸で日本海へ、大部分の人たちが船酔いで大変でした。船内は大した騒ぎもなく、上陸で国の支給品は服と毛布一枚、金参百円でそれぞれの指定列車で故里へ。二度と起こしてならない悲劇、墓標なき戦友を偲んで、ペンをおきます。

敗戦、そして抑留

和歌山県 土井 昇

酷寒で名高いここ北滿チチハルも、八月はさすがに暑い。この世に生を享けて二十五年、夢想だにもしなかつた敗戦の報に、一時はどうなることかと落ちつかぬ日を過ごすこと十数日、やがて武装解除の日が来た。

ここチチハルに集合した関東軍の将兵数万人といわれた。我々が整列した目の前を、胸いっぱいのお勲章をつけ、意気揚々と闊歩するソ連軍の男女将校。涙が出るほど口惜しい。殺されてもいい、飛びかかってやりたいと思つたのは私一人だけではあるまい。

十月初旬この数方の友軍は千五、六百人くらいに大隊編成され、私も第十一大隊小谷少佐の指揮下に入った。日本軍の団結を考慮したのか、各隊からの混成で見知らぬ人ばかりだ。

「お前たちはこれから故国日本へ帰るのだ」というソ